

田畑の草種

蚊屋吊草・蚊帳吊草・柎草・莎草
(カヤツリグサ)

(公財)日本植物調節剤研究協会
兵庫試験地 須藤 健一

カヤツリグサ科カヤツリグサ属の一年草。本州から九州までの路傍、田畑、荒地などにごく普通。背丈は30cmから50cm。全体に緑色で光沢がある。茎の断面は三角形。節はなく枝分かれせずまっすぐに伸び、茎頂に細長い葉状の苞葉を数枚つけ、その間から5本から10本の花序枝を散形に出す。

「蚊帳吊草」の名のもとになった「蚊帳」は、クレオパトラも使っていたといわれるくらいに古くからある。日本へは中国から伝わり、江戸時代に入ると庶民まで広く使われるようになるが、庶民の子どもたちの間ではそれより早くから「蚊帳吊り遊び」という遊びがあった。

道端に生えているこの草の茎を切って両端を二人で持ち、三角形の茎をお互いに割っていく。うまくいけば柎形の方形ができ、失敗するとバラバラになってしまう。うまくいったとき二人は仲がいいといわれ、失敗すると悪いとされる。そんな子ども

もの遊びであるが、出来上がった方形の柎形が、ちょうど蚊帳を吊ったときの天井の形に似ていることから「蚊帳吊草」の名がついた。

江戸期の俳人松尾芭蕉も、近所の子ども達からこの遊びを教えてもらっていたに違いない。芭蕉本人に「蚊帳吊草」を詠んだ句はないが、奥の細道の旅の途中に金沢に立ち寄ったとき、芭蕉門人の立花北枝らと句会を開いている。その時に北枝の詠んだ句、

翁にぞ蚊屋つり草を習ひける

芭蕉が金沢に立ち寄ったのは新暦8月末、カヤツリグサは路傍に数多く咲いていたはずである。路傍のカヤツリグサを手折って蚊屋吊り遊びを披露する芭蕉を、北枝は微笑ましく眺めていただろう光景が浮かんでくる。